

高嶺剛氏の映画程「見方」の分かれる映画は無い。「評価」では無い、「見方」である。

ある者は痴を見る、ある者は威を見る、ある者は快を見る、ある者は空を見る。

氏の映画に明確な「見方」は無い。氏は最も描きたいものを『におい』や『空気』と語り、『絶対的な場所の固有性』の前にあらゆるものは相対化される。

ならば、氏の映画を見た時に感じるこの衝撃の核は何か？

それは、スクリーンのわきから滲み出る『におい』や『空気』に乱反射され写し出される観客自身ではないのか。だからこそ「評価」では無く「見方」が分かれるのではないか。

例えば、氏の映画には『沖縄』という『言葉』が付きまとう。

しかし、八重山にとって琉球王朝・沖縄とはなんであろうか。

氏が描きたいもの、それは『沖縄』ではなく、

東経 123 度北緯 24 度から東経 131 度北緯 27 度の島々に住む人間の営みと自然とが入り交じった『におい』と『空気』なのかもしれない。

2012年5月15日『沖縄』の『復帰』40年の日に氏の映画を見て、何を思っても自由だ。

「凝り固まった見られ方は嫌だ」と語る氏の映画には無限の自由がある。

だからこそ、気を付けて欲しい。あなたが抱いたその感想は、

スクリーンから滲み出る『絶対的な場所の固有性』の『におい』や『空気』に乱反射したあなた自身の姿なのかもしれないだから。

・・・ところで『復帰』をめぐる会話

関西沖縄文庫 しまくとうばぬ会

- 1972.5.15 「はあーなあー、チルダイすっさー」  
 2012.5.15 「何ですかそれ？それより復帰40年ですよ！  
 何かご感想は？」  
 1972.5.15 「ぬーが？なまんなてい、  
 チルダイすっしーん、チルダイすんやー」  
 2012.5.15 「いえーだからよー・・・あれ？」

## ■ 紹介 ■ 高嶺 剛 (たかみね ごう) 映像作家

沖縄石垣島出身。京都在住。

小学生になる前に那覇市に移り住む。1969年、「国費留学生」として京都教育大学特修美術学科に進学する。在学中から自主映画を取り始めるが、大学中退。沖縄をテーマとする映画を制作している。

ジョナス・メカスの影響をもとにドキュメンタリー映画を撮っていたが、『パラダイスビュー』（1985年）からは劇映画に進出。1989年の作品『ウンタマギルー』は日本映画監督協会新人賞、ベルリン国際映画祭カリガリ賞、三大陸映画祭最優秀賞などを受賞した。

### 【監督作品】

サシングワ（1973年）、オキナワン・ドリーム・ショー（1974年）、オキナワン・チルダイ（1976年）、パラダイスビュー（1985年）、ウンタマギルー（1989年）、嘉手苺林昌 唄と語り（1994年）、私的撮夢幻琉球 J・M（1996年）、夢幻琉球・つるヘンリー（1999年）、OKINAWA SHIMAUTA QUEEN 大城美佐子（2007年）、Puppet shaman star（2008年）